

アオテアロア・ニュージーランドの博物館都市 ダニーデン (Dunedin)

伊藤 慎二

はじめに

オタゴ州 (Otago region) の州都ダニーデン市 (マオリ語名 *Otepoti*) (註1) は、アオテアロア (Aotearoa: ニュージーランドのマオリ語正式名称) の多様な歴史を象徴する都市である (第1図左)。都市の規模としては、同国南島二番目の人口134,600人(2023年現在)の小さな町である。しかし、在来土着のマオリ文化と新来のヨーロッパ文化が折り重なった固有の歴史的・文化的背景 (第1図右) が、さながら「博物館都市」といえるほど多様で豊かな同国屈指の博物館文化を生み出している。本稿では、このダニーデン市域の各博物館を悉皆的に現地調査し、アオテアロアの博物館文化の特色と課題を博物館学的観点から考察する。なお、筆者の研究関心上、マオリ文化に関連する考古学・歴史学系博物館について特に多く言及する。

I. ダニーデンの歴史文化景観

ダニーデン市周辺地域への人類進出最古の年代は、确实なところではAD1150年頃以降とみられている (Hamel 2001)。ポリネシア系先住民族マオリ (Maori) 人の祖先がこの地域へ定着した当初は、シャグ川河口 (Shag River Mouth) 遺跡に代表されるように、飛べない大形鳥類のモア (Moa) (印東 2008) などを重要な食料資源としていた。沿岸河口部を中心に内陸各地にも石材採取や狩猟活動のための集落が営まれた (Anderson 1983, Anderson, Allingham and Smith eds. 1996)。しかし、モアの絶滅後内陸部の遺跡は減少した。寒冷でサツマイモ

(*Kumara*) 栽培が困難であったため、おもにさまざまな漁撈狩猟採集と交易を営む集落が沿岸各地に偏在した (Goodall and Griffiths 1980)。当時の集落のなかには、アオテアロアのマオリ社会全体で重要な威信材素材となった南島 (*Te Wai Pounamu*) 原産の緑色の軟玉 = ポウナムウ (*Pounamu*, Green Stone, New Zealand Jade, Nephrite) 加工と交易にかかわる重要集落ファレアケアケ (*Whareakeake*) 遺跡 (Skinner 1959) もあった (第2図a)。そして、マオリ社会の複雑化に伴い、「一族郎党」間での争いも激化し、城郭・防御性集落のパ (*Pa*) が各所に構築された。段状遺構 (切岸) や土塁・空堀が現存する例ではカリタネ (*Karitane*) 半島のフリアワ城 (*Huriawa Pa, Pa a Te Wera*) (第2図b) などが知られる (Brailsford 1997)。

なお、マオリ社会での19世紀頃の神話伝承によれば、ダニーデン市周辺に到来定着したマオリ人歴代の支族 = イウイ (*Iwi*) は、最初に巨人のカフイ = ティプア (*Kahui Tipua*) が登場して大地を現在のオタゴ湾周辺の地形に造りかえた。その後テ = ラプワイ (*Te Rapuwai*) 支族やワイタハ (*Waitaha*) 支族が移住してきたという。より確実な歴史としては、16世紀にカティ = マモエ (*Kati Mamoe*) 支族が定着し、さらに17世紀にカイ = タフ (*Kai Tahu, Ngai Tahu*) 支族が渡来合流したとされる (McLintock 1949, Goodall and Griffiths 1980)。

そして、ヨーロッパ人の到来期をむかえる。ジェームズ = クック (James Cook) 率いるイギリス海軍のエンデヴァー (*Endeavour*) 号が、1770年にヨーロッパからこの地に初めて来航した。その後、19世紀になると欧米人 (*Pakeha*) の捕鯨者



第1図 左：ダニーデン市中心部・オタゴ湾・オタゴ半島遠景（※筆者撮影）と右：ダニーデン市市章



a. ファレアケアケ遺跡遠景



b. フリアワ城 (Pa a Te Wera) 遠景



c. 市内中心部マオリ時代船着き場 (Toitū Tauraka Waka) 跡記念碑



d. 植民地期強制労働マオリ人犠牲者慰霊碑



e. オタクウ地区祭儀場 (Otakou Marae)



f. 市内中心部 Ko te Tuhono 記念碑

第2図 ダニーデン市周辺のマオリ系歴史文化景観 ※筆者撮影

(whalers)・アザラシ(海獣) 猟者(sealers) が次々に訪れ、地域のマオリ社会と時に抗争しながらも急速に混住が進んだ(McLintock 1949, Olssen 1984)。ダニーデン市中心部の「証券市場(The Exchange)」広場には、当時のマオリ人の集落オーテポティ(Otepoti) に接するトイトゥ川河口の船着き場(Toitu Tauraka Waka) 跡記念碑がある(第2図c)。

やがて1848年には、スコットランド自由教会(長老派) による集団入植が開始された(McLintock 1949, Olssen 1984, 沢井 2003)。ダニーデンの名称は、スコットランドの首都エジンバラのゲール語古称にちなんで名づけられた。スコットランド入植団の世俗的な代表者であるウィリアム=カーギル大尉(Captain William Cargill) 関連の記念物や地名も各所に残る。「証券市場」広場には尖塔形の記念碑(第3図a) が立ち、その息子で実業家のエドワード=カーギル(Edward Cargill) が1876年に建てた豪華な城館風邸宅カーギル城の廃墟(第3図f) も市街地南端の海岸断崖上に残っている(Olssen 1984, McLean 2003)。また、ダニーデン南墓地には、故郷のケルト十字風の墓標を建てたスコットランド系入植者の墓もみられる(第3図g)。

ダニーデンの近代都市としての飛躍的發展は、その後続く出来事が決定打となった。ガブリエル=リード(Gabriel Read) により、大規模な金鉱が内陸部のガブリエルズ溪谷(Gabriel's Gully) で1861年に発見されたのである。これをきっかけに起きたゴールドラッシュは、ダニーデンを中心とするオタゴ地方に多数の移住者を引き寄せた。東アジアからも清朝末期の中国から多くの移民労働者がやってきてこの国を代表する華僑社会の礎となり、ダニーデン南墓地に中国式墓碑を残すことになった(第3図h)。

なお、同時期の19世紀の北島では、入植者とイギリス王室・政府(Crown) の圧倒的な武力による土地侵奪に対して、卓越した築城術と巧妙な戦術で各地のマオリ社会が頑強な抵抗戦(New Zealand Wars) を繰り広げていた。一転してその最終段階には、北島タラナキ(Taranaki) 地方のパリハカ(Parihaka) 村を中心にテ=フィティ=オ=ロンゴ

マイ3世(Te Whiti O Rongomai III) らの指導による植民地権力への非暴力・不服従運動が高揚をみせた(Keenan 2015, 向井 2015)。インドのマハトマ=ガンジーよりもおよそ70年早い非暴力・不服従の抵抗運動である(向井 2015)。しかし、タラナキ地方で逮捕拘束されたマオリは、1869~1881年にかけて移送収監先のダニーデンで幹線道路建設工事などの強制労働に従事させられ、多くの死者を出した。イギリスによる同様の圧政支配に故郷で苦しんでいたアイルランド系ダニーデン市民のなかには、家屋玄関にパリハカ・マオリとの連帯意思を明示したものが当時いた(Petchey and Brosnahan 2016)。市も公的に関与した強制労働犠牲マオリ人慰霊碑(第2図d) などは、ようやく2000年代になって市内3箇所に建立された(Church 2019)。ダニーデン周辺の在来マオリ社会もほとんどの土地を侵奪されたが、オタゴ半島先端部のオタコウ(Otakou) 地区は旧来の地域社会伝統が息づいている(第2図e)。市街中心の八角広場(Octagon) にも、オタコウ祭儀場(Marae) の建築装飾を題材に、マオリ時代の土地の記憶と現代のダニーデンを結ぶコ=テ=トゥホノ(Ko Te Tuhono) 碑(第2図f) が2021年に建立された。また、出身支族を問わずに市内在住マオリが参集できる現代的なアライテウル祭儀場(Arai Te Uru Marae) が、1980年にダニーデン市中心部に創設されている(Goodall and Griffiths 1980)。

ゴールドラッシュを契機にダニーデンの人口は激増し、産業發展とヨーロッパ的都市景観の整備が急速に進んだ。19世紀末の一時期には国内随一の大都市となった。オタゴ湾口により近いポートチャルマース(Port Chalmers: 第3図d) は、ダニーデンの重要な外港機能を担って同時期に發展した。ダニーデンの中心市街にはヴィクトリア朝期(1837-1901年)・エドワード朝期(1901-1910年) のネオゴシック(Neo-Gothic) 建築様式やネオルネッサンス(Neo-Renaissance) 建築様式の豪壮華麗な建物が現在も多く残り、街並み景観の特徴となっている(Johnson 1993, McLean 2003) (第3図a・b・c・e)。そして、このような都市文化の發展が進むな



a. 「証券取引所 (The Exchange)」 広場



b. ダニーデン駅



c. ダニーデン高等・地方裁判所



d. ポートチャルマース中心部



e. オタゴ大学時計塔



f. 入植富裕層の城館風邸宅 (カーギル城)

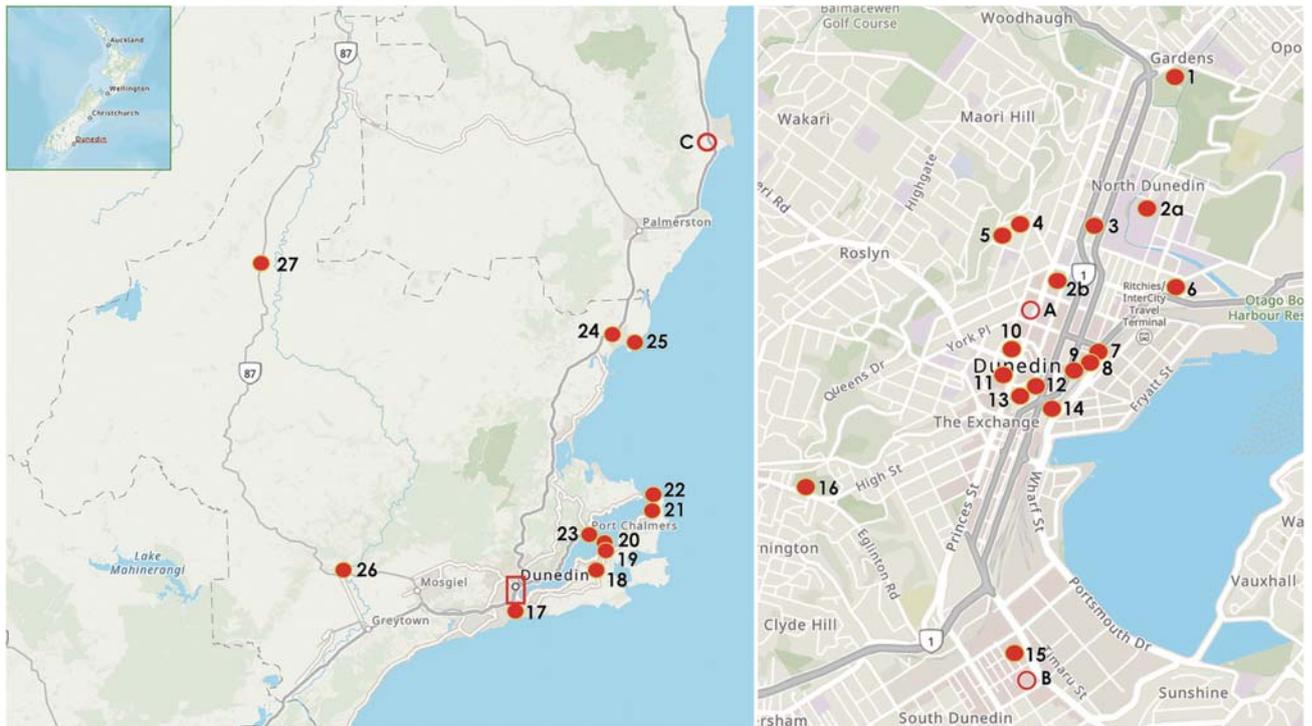


g. スコットランド人入植者の墓碑



h. 中国人移民労働者の墓碑

第3図 ダニーデン市周辺のヨーロッパ系歴史文化景観 ※筆者撮影



第4図 ダニーデン市周辺の博物館の位置 (凡例 ● : 博物館、○ : 関連施設) ※ Department of Conservation Maps を基に加筆作成

第1表 ダニーデン市周辺の博物館一覧

番号	名称	原語表記正式名称	分類	住所
1	ダニーデン植物園	Dunedin Botanic Garden	植物園	Great King Street North, Dunedin North, Dunedin 9016
2a	オタゴ大学地学博物館	Geology Museum, University of Otago	科学	Department of Geology, University of Otago, 360 Leith Street, Dunedin 9016
2b	オタゴ大学 W. D. トロッター解剖学博物館	W. D. Trotter Anatomy Museum, University of Otago	科学	Lindo Ferguson Building, 270 Great King Street, Dunedin 9016
3	オタゴ博物館	Tūhura Otago Museum	総合	419 Great King Street, Dunedin 9016
4	ダニーデン自然の不思議博物館	Dunedin Museum of Natural Mystery	美術	61 Royal Terrace, Dunedin 9016
5	オルヴェストン歴史的邸宅	Olveston Historic Home	野外	42 Royal Terrace, Dunedin North, Dunedin 9016
6	オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー	Hocken Collections and Gallery, University of Otago	美術ほか	90 Anzac Avenue, Dunedin Central, Dunedin 9016
7	ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂	New Zealand Sports Hall of Fame	歴史	Railway Station, Anzac Avenue, Dunedin 9016
8	オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー	Dunedin Art Gallery, Otago Art Society	美術	Level 1 Dunedin Railway Station, 22 Anzac Avenue, Dunedin 9016
9	ダニーデン監獄	Dunedin Gaol (Dunedin Prison)	野外	2 Castle Street, Dunedin 9016
10	ダニーデン市図書館リードギャラリー	Reed Gallery, Dunedin City Library	美術ほか	230 Moray Place, Central Dunedin, Dunedin 9054
11	ダニーデン公共美術館	Dunedin Public Art Gallery	美術	30 The Octagon, Dunedin 9016
12	ファーストチャーチ遺産・ビジター室	Heritage and Visitors' Centre (Moray Hall), First Church of Otago	歴史	415 Moray Place, Central Dunedin, Dunedin 9016
13	ブルーオイスターアートプロジェクトスペース	Blue Oyster Art Project Space	美術	16 Dowling Street, Central Dunedin, Dunedin 9016
14	オタゴ入植者博物館	Toitū Otago Settlers Museum	歴史	31 Queens Garden, Dunedin 9016
15	ダニーデンガス工場博物館	Dunedin Gasworks Museum	歴史・野外	20 Braemar Street, South Dunedin, Dunedin 9012
16	モーニングトンケーブルカーハウス・展示	Mornington Cable Car House and Display	野外	161 Eglinton Road, Mornington, Dunedin 9011
17	オーシャンビーチ鉄道	Ocean Beach Railway	野外	3 John Wilson Ocean Drive, St. Kilda, Dunedin 9013
18	ラーナック城	Larnach Castle	野外	145 Camp Road, Larnachs Castle, Dunedin 9077
19	オタゴ半島博物館	Otago Peninsula Museum	歴史・野外	17 Harington Point Road, Portobello, Dunedin 9014
20	ニュージーランド海洋研究センター (オタゴ大学海洋科学部)	New Zealand Marine Studies Centre, Department of Marine Science, University of Otago	科学	185 Hatchery Road, Portobello, Dunedin 9014
21	オタクウ記念メソジスト教会博物館	Otakou Memorial Methodist Church Museum	歴史	Otakou Marae, 25 Tamatea Road, Portobello, Dunedin 9077
22	ロイヤルアルバトロスセンター	Royal Albatross Centre	総合・野外	1259 Harington Point Road, Harington Point, Dunedin 9077
23	ポートチャルマース海事博物館	Port Chalmers Maritime Museum	歴史	19 Beach Street, Port Chalmers 9023
24	ワイコウアイティ海岸遺産センター	Waikouaiti Coast Heritage Centre	歴史・野外	200 Main Road, Waikouaiti 9510
25	マタナカ農場	Matanaka Farm	野外	51 Matanaka Road, Waikouaiti 9510
26	タイエリ歴史協会・博物館	Taieri Historical Society and Museum	歴史・野外	23 George King Memorial Drive, Outram 9074
27	ストラスタイエリ歴史博物館 (ミドルマーチ博物館)	Strath Taieri Historical Museum (Middlemarch Museum)	歴史	5 Aberafof Street, Middlemarch 9597
A	ウォールストリートモール内遺構展示	Wall Street Mall	野外	211 George Street, Central Dunedin, Dunedin 9016
B	聖パトリック聖堂遺構露出展示	St Patrick's Basilica	野外	40 Macandrew Road, South Dunedin, Dunedin 9012
C	モンテレイ博物館 (閉館)	Monterey Museum	総合	Hillgrove 9482 付近

かで、研究教育文化の基礎も整備された。1865年に「証券市場」広場付近で開催された同国最初のニュージーランド博覧会 (New Zealand Exhibition) がきっかけで1868年にオタゴ博物館、そして1869年に国内最古のオタゴ大学が創設されたのである (Peat 2004)。

II. ダニーデンの各博物館

以下に取り上げるダニーデン市内の各博物館は、日本における一般的な分類 (総合博物館、歴史博物館、美術博物館、科学博物館、動物園、水族館、植物園、動植物園、野外博物館) に該当する事例である。このうち美術博物館については、市内に関連する「アートギャラリー」が多く存在するが、アオテアロアの博物館・文書館など「コレクション」所蔵機関を網羅した web サイト「*Kōtuia ngā Kete (Kōtuia)*」紹介事例のみを含めた。それらの結果、ダニーデン市域に、現在合計28館 (オタゴ大学の学部が設置した2館をそれぞれ含む) の博物館の存在を確認できた (第4図・第1表)。また、考古学関連で遺構の現地保存展示を行っている事例や、近隣ですでに閉館している事例合計3件も関連施設として紹介する。これらのうち、郊外遠隔地にあるタイエリ歴史協会・博物館 (26) とストラスタイエリ歴史博物館 (27) を除き、すべて現地調査を行った (註2)。

なお、以下の各館に関する記述は、展示図録や解説書などが刊行されている博物館事例を除き、特にことわらない場合各館のリーフレット・展示解説パネル・ホームページを参考にした。入館料・開館日などの情報は、2025年1月時点の情報である。また、開館時間は夏季・冬季あるいは平日・週末などで変動する博物館が少なくない。

(1) ダニーデン植物園 Dunedin Botanic Garden : 第5図 (1) 1a~1d

1863年の開園当初は、現在地よりも南側の市街地の一面に創設された。しかし、洪水による深刻な

被害の結果、1869年に現在の位置に移動して再開園した。国内最古の同国を代表する植物園である (Dunlop 2002)。市街地北部の谷と丘にまたがって広大な園地が広がる。園内の標高差は25m~85mで、低地の下園 (Lower Gaden) と丘上の上園 (Upper Garden) の大きく二つに分かれる。総面積は33ヘクタールで、6800種以上の植物を育成している。

正門 (1a) がある下園部には、1908年完成のイギリス・エドワード朝期建築の温室 Winter Garden Glasshouse (1b) が現在も維持活用されており、植物園の象徴的建物である。そのすぐ東側には情報センター (1c) があり、簡単な園内解説展示や園内各見学コースの解説地図などが無料配布され、観察見学会など学習活動の拠点にもなっている。広大な園内は、高山植物園・椿園・五大陸植物園・在来植物園・バラ園・湿性植物園・鳥類観察小屋 (1d) などに分けられており、多様な生態系の違いに応じた植物の様相を見学鑑賞できる。なお、下園部には、ダニーデン市と姉妹都市関係にある北海道小樽市が提供した日本庭園がある。

園内一部施設を除き年中無休で、無料開園している。

(2a) オタゴ大学地学博物館 Geology Museum, University of Otago : 第5図 (1) 2a-a・2a-b

オタゴ大学でも最古級の1878年建設の地学部棟の一室にある。同国南島で最大級の重要基準資料となっている岩石・鉱物・古生物化石のコレクションを所蔵しており、学部・大学院研究教育で参照活用されている。比較的小規模の展示室内と入口廊下に合計15台の展示ケースが設置されている。それらのなかには、ダニーデン周辺の地質年代区分関連資料、カンブリア紀・三疊紀・白亜紀・漸新世の標準的な古生物化石標本と各種鉱物標本があり、ケース内はかなり密に展示されている。解説パネルなどはほとんど無い。なかでも、クジラの祖先にあたるスクアロドン科の頭骨が印象的である。隣接する作業室内での化石精査作業状況も窓越しに見学可能であ



1a ダニーデン植物園正門



1b 同温室



1c 同情報センター (右)



1d 同鳥類観察室



2a-a オタゴ大学地学博物館入口



2a-b 同展示室



2b-a オタゴ大学解剖学博物館入口



2b-b 同展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館 (1) ※2b-b (同博物館 Chris Smith 学芸員提供) を除き、筆者撮影

る。また、建物外にも巨大な岩石標本・化石などが屋外展示されている。

原則として学期期間中の平日に無料開館している。

(2b) オタゴ大学 W.D. トロッター解剖学博物館 W. D. Trotter Anatomy Museum, University of Otago : 第5図 (1) 2b-a・2b-b

オタゴ大学設立から間もない1875年に開設された、ダニーデン屈指の歴史の古い博物館である。開館当初は、オタゴ博物館と同じく「証券市場」広場の建物内に医学部とともにあったが、その後現在地学博物館がある建物への一時移転を経て、最終的に現在の解剖学部棟内に再開館した。現在の博物館は、学習実践活用しやすくするため各種人体模型などを旧来の重厚な展示ケース内から取り出して展示し、さらに学習スペースなどを拡大した W.D. トロッター教授時代の展示改革に基づいている。同教授の2001年の死去に際して、館名も W.D. トロッター解剖学博物館に改称された。収蔵展示資料の特色は、約3000点のカタログ化された解剖標本類のほか、19世紀後半から20世紀初頭にドイツ・イギリスなどで製作された磁器製・蠟製・石膏製を含む歴代の貴重な人体解剖模型類や古典彫像模型類である (Neuman 1993, Baillie and Smith 2018)。なお、解剖学博物館から分離した病理学博物館は、現在オタゴ大学ウェリントン校に移転している。

主として学内の教育研究参考用の施設のため、見学には事前申請などが必要である。

(3) オタゴ博物館 *Tūhura* Otago Museum : 第5図 (2) 3a~3h

オタゴ大学に隣接する市街地北部にあるアオテアロアを代表する大規模総合博物館の一つである。正式名称には、発見・調査・探検を意味するマオリ語 *Tūhura* を冠している。オタゴ博物館信託委員会法 (Otago Museum Trust Board Act) に基づき、ダニーデン市などのオタゴ州各自治体や国からの財政支出をはじめ、企業・民間団体・個人の寄付金など

を基に運営されている。

1865年に市内で開催されたニュージーランド博覧会出展の「オタゴ博物館」と名づけられた岩石鉱物標本コレクションが基となり、現在の「証券市場」広場にあった郵便局建物内に1868年に開館した。その翌年には、同一建物内にオタゴ大学も創設され、両者はその後も現在に至るまで緊密な連携関係を維持している。そして、収蔵資料の増大に対応するため、1877年に現在地に移転再開館した (Peat 2004)。当時の建物は現在も使用され続けており、旧正面入口も現存している (3b)。4階部分の動物屋根裏展示室 (3h) は、現在地での開館当初の展示室の雰囲気再現している。その後も1910年・1930年・1963年に当初建築の東側に大幅な増築を繰り返した。現在では当初規模の数倍に拡大し、正面入口も位置が変更されている (3a)。さらに、1990年代以降の逐次的な内部改装を経て、現在の常設展示の中心である3階の南島南部の土地と人々展示室や、国内で最初の試みとなった双方向的な科学体験館が2階に整備された。ちなみに、ダニーデン市と姉妹都市の北海道小樽市で、2002年にオタゴ博物館コレクション展が開催されている (小樽市博物館編 2002)。

館内の展示は、2階と3階に分かれる。2階は、マオリ民俗文化展示室 (*Tangata Whenua* = 土着の人々) とポリネシア・メラネシア文化展示室 (Pacific Cultures) の二部屋が主要な展示室である。そのほかに、特別展示室や、有料で独立別区画の蝶が舞う人工熱帯林やプラネタリウムなどを含む科学体験館 (*Tūhura* Otago Community Trust Science Centre) もある。3階は、南島南部の土地と人々展示室 (Southern Land, Southern People) ・自然展示室 (Nature) ・海事展示室 (Maritime) ・世界の人々展示室 (People of the World) に分かれる。動物屋根裏展示室 (Animal Attic) は4階に相当する。ここでは、常設展示室のみを取り上げる。

2階のマオリ民俗文化室は、マオリ地域社会 (*Kai Tahu* 支族) 有識者の監修で現在のマオリの伝統的世界観に基づいた展示構成である。歴史学・考古学・文化人類学よりも、民俗学的な観点のマオリ文



3a オタゴ博物館正面



3b 同旧正面



3c 同土着の人々展示室



3d 同太平洋の諸文化展示室



3e 同南島南部の土地と人々展示室



3f 同南島南部の土地と人々展示室



3g 同南島南部の土地と人々展示室



3h 同動物屋根裏展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（2） ※筆者撮影

化展示といえる。展示室中央にある精緻な彫刻で覆いつくされた軍舟 (*Waka Taua*) と大形の儀礼建物 (宝物庫や儀礼会所) の彫刻類が目目を引く。しかし、これらはいずれも北島のマオリ文化にまつわる資料である。オタゴ地方などの南島のマオリ文化に関しては、その左右両側の展示区画で多く扱う。特に軍舟の左側には、オタゴ地方の代表的な考古資料が多く展示されている。軍舟のすぐ左側の人頭形木彫は、南島でも古相の舟首彫刻 (*Tauihu*) として著名である。また、その近くの展示ケース内には、木柱に取り付けた特殊な展示手法で、南島特有の希少な鯨歯製山形護符がみられる。そして、その奥にはシャグ川河口 (Shag River Mouth) 遺跡関連の特集展示区画 (3c) が続く。シャグ川河口遺跡は、オタゴ地方の人類居住最古段階のモア狩猟期から長期間継続した拠点的な集落遺跡である。さまざまな文化遺物のみでなく、モアやアザラシ・クジラ・犬・魚貝類などの豊富な自然遺物も出土している。詳細な発掘調査報告書 (Anderson et al. eds. 1996) も刊行されたアオテアロアを代表する先史遺跡の一つである。中央に同遺跡のジオラマ復元展示がある。その周囲の展示ケースに釣針・銚頭などの骨器類とその未成品、穿孔されたモアの卵殻、貝製・軟玉製の装身具・威儀具類、各種磨製石斧類や、オタゴ地方で独自に発達した石刃技法とその接合復元石核資料などが展示されている。さらに奥へ進むと、先史時代後半のマポウタヒ城 (*Mapoutahi Pa*) のジオラマ模型や同時期の威儀具類、初期のヨーロッパ人捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者とマオリ社会の接触期の各種資料などの展示がある。

同じく2階のポリネシア・メラネシア室は、20世紀前半のヘンリー＝スキナー (Henry Devenish Skinner) 館長時代の収集資料を中心である。同館とその連携研究者の調査収集資料を含む各島嶼地域別の豊富な民族・考古資料の展示である。前室のポリネシア室では、島外での所蔵は稀なラパヌイ (イースター) 島の小形モアイ像 (3d 中央) のほかに、東ポリネシアのピトケアン (Pitcairn) 島から出土した多数の石器類の展示が目される。ピトケア

ン島の先史時代石像 (3d 中央右端) は世界で唯一の現存例である。伝統的な武具一式を装備したキリバス諸島 (ミクロネシア) の人物模型や、サモア諸島の家屋や儀礼会所情景展示なども印象的である。後室のメラネシア室では、パプアニューギニアの更新世の石器や先史時代メラネシア島嶼部のラピータ (*Lapita*) 式土器をはじめ、各島嶼地域別に多数の民族資料が展示されている。ニューカレドニアの首長居宅屋根上の装飾柱や装飾扉も希少な民族資料である。

3階の南島南部の土地と人々展示室 (3e) は、同館を代表するオタゴ地方の考古・歴史・自然全体に焦点をあてた総合展示室である (Peat 2002)。正面左手奥壁面には、オタゴ地方の先史時代の岩絵が再現され、その手前には軟玉 (*Pounamu*) 製品製作拠点遺跡と推測されているファレアケアケ (*Whareakeake*) 遺跡から出土した軟玉製の神人形の垂飾ヘイ＝ティキ (*Hei Tiki*) が多数展示されている。国内を代表する出所が明らかなヘイ＝ティキのコレクションである。ロングビーチ (Long beach) 遺跡出土の大形の黒曜石塊は、北島北部との際だった遠距離交易を証明する希少な遺物である。また、石材産地のオトゥレフア (*Oturehua*) 遺跡から出土した珪質岩 (*Silcrete*) 製の大型石刃石核や、リトルパパヌイ (*Little Papanui*) 遺跡など出土の骨製漁撈具類も注目される。そして、先史時代マオリ社会の地域における食料・資源獲得の歩みが、その後のヨーロッパ人の資源開発などの歴史に接続される。欧米系の捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者来航からゴールドラッシュ時代に向かう流れも、壁面全面の展示で駆け足気味に紹介され、隣に続く海事展示室への導入ともなっている。

3階の海事展示室では、開館初期の19世紀末からの所蔵資料である巨大なナガスクジラの骨格標本が中央に展示されている。その周囲には、19世紀後半以降のダニーデンの産業発展を支えた、ダニーデン創業のユニオン蒸気船会社 (*Union Steam Ship Co.*) の貨物・旅客海運関連合計62隻の船舶模型展示ケースや船鐘・船旗などが密に並べられている。

3階の南島南部の土地と人々展示室正面右手には、最古の人類が重要な食料資源とした絶滅大形鳥類モアの展示が一画を占める。特にモアの大小様々な種の全身骨格標本10体の展示(3f)は圧巻で、同館所蔵のモア関連コレクションは世界随一として知られる。そして、その奥側には、古生物化石の展示が続く斜路がある。そこでは、アオテアロア最大の古生物化石であるジュラ紀～白亜紀の海生爬虫類首長竜(マタカエア・シャグ岬発見)や、ジャイアントペンギンの化石などが目立つ。斜路を登りきると、そのまま自然展示室につながる。

3階の自然展示室では、オタゴ半島などオタゴ地方各所で見られる代表的な生物(鳥類・両生類・爬虫類・昆虫類など)に関する展示が行われている。なかでも、絶滅危惧種で飛べない鳥類のタカヘ(Takahē)、原始的な爬虫類ムカシトカゲ(Tuatara)、愛称 *Autahi* と名付けられていたヒョウアザラシの剥製と全身骨格などの展示が代表的である。

2～3階の一連の常設展示室では、古生物展示区画から自然展示室が、多数のジオラマ展示とともに随所に子供目線も意識した独創的な展示工夫が多数導入されている(3g)。

3階の世界の人々展示室では、ヨーロッパ・アジア・オーストラリア・アフリカなど、世界各地からの多様な移住者・旅行者の故郷に関わる資料を一堂に会して展示している。こうした多文化理解を促す展示は、同館への歴代の重要な寄贈品コレクション(Otago Museum ed. 2014)も組み合わせて構成している。展示資料は、衣装・装束・武具・陶磁器が多くを占め、日本美術のコレクションも含まれる。また、西洋古典文化学習用の古代ギリシア・ローマ関連資料や、ミイラを含む古代エジプト関連資料も一画にまとまっている。

事実上4階に相当する動物屋根裏展示室は、開館当初の19世紀末ヴィクトリア朝期の展示状況を再現した一室である。天井から自然光を採り入れたかつての明るい展示室を意識した照明の下に、重厚な展示ケースが四方の壁面に沿って整然と配置されてい

る(3h)。大小さまざまな生物標本・剥製類が生物分類別に展示されている。3階海事室のナガスクジラ骨格標本も、かつてはこのような展示室の中央空間で展示されていた。

1960～1970年代にかけて特に生物学や考古・文化人類学に関する館独自の調査研究成果が、紀要や報告などとして多数出版されていた。現在は同館ホームページ上でそれらの閲覧が可能である(註3)。

2階の科学体験館や特別展示室を除き、2・3階の常設展示室は無料(任意寄付制)である。クリスマスを除き、年中無休で開館している。

(4) ダニーデン自然の不思議博物館 Dunedin Museum of Natural Mystery : 第5図(3)4a・4b

中心市街地西側の急坂途中にある個人住宅を活用して2018年に開館した私立博物館である。敷地外周のラパヌイ(イースター)島のロンゴロンゴ文字風装飾が目印である(4a)。設立者で芸術家のブルース＝マハルスキ(Bruce Mahalski)氏の個人収集コレクションを展示する二室と芸術作品を展示する一室からおもに構成される。前近代ヨーロッパの「驚異の部屋(Wunderkammer)」的な展示手法が採用されている。個人収集コレクション関連は、モアの骨・卵殻を含むさまざまな動物の頭蓋骨を集めた展示室(4b)や、赤道アフリカ地域の仮面などの民族芸術や不可解な事件にまつわる品々などの展示室に分かれる。作品展示室では、さまざまな動物の骨やサンゴ片を緻密に組み合わせて制作した神秘的な人形の胸像などが展示されている。考古資料も若干展示されており、東ポリネシアのピトケアン島で1965年に発掘されたという磨製石斧類などがある。

入館料は大人10NZ\$で、原則として金土日のみが開館である。

(5) オルヴェストン歴史的邸宅 Olveston Historic Home : 第5図(3)5a・5b

イングランド出身のユダヤ系の実業家・慈善事業家のデヴィッド＝テオミン(David Theomin)とその娘ドロシー＝テオミン(Dorothy Theomin)の旧

邸宅である(5a)。テオミン父子は、後述するダニーデン公共美術館(11)などにも長年財政的支援を行っていたことで知られる。邸宅名は、故郷近くの避暑地の村落名にちなんでオルヴェストンと名づけられた。1906年に完成した邸内には、デヴィッド＝テオミン夫妻が20世紀初めのヨーロッパ旅行などで収集した多数の美術工芸品で満ちあふれている(5b)。それら20世紀前半の富裕層の美意識が結晶した美術工芸調度品と周囲の庭園を含む邸宅すべてが、1966年のドロシー＝テオミンの死去に伴い遺言でダニーデン市に一括寄贈された。現在は市などにより文化財として保存管理され、テオミン家生活当時のまま公開されている。邸内の美術工芸品は、ヨーロッパの家具・絵画・陶器などのほかに、陶磁器・七宝・根付・刀槍など日本・中国や一部西アジアを含む東洋美術も多い(Longstaff et al. eds. 2004)。

敷地内の庭園入園は無料であるが、邸宅内は事前予約制の一日6回のガイド付きツアーでのみ見学可能である。入館料は大人25.50NZ\$で、クリスマスを除き年中無休で開館している。

(6) オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー — Hocken Collections and Gallery, University of Otago : 第5図(3)6a・6b

アオテアロアを代表する同国に関する貴重史資料収蔵図書館2階の一室にある付属展示施設である(6a)。名称の由来であるトーマス＝ホッケン医師(Dr. Thomas Morland Hocken)は、1836年にイングランドで生まれ、アオテアロアに移住後ダニーデンで医院を開業した。医師としての優れた業績でダニーデンの名士として名をはせ、全国医師会会長やオタゴ大学の理事としても活躍した。そうした日々の仕事のかたわら、アオテアロア・太平洋に関する史資料・民族資料の収集保存に情熱を傾けた。やがてオタゴ大学が当時管理運営していたオタゴ博物館にそれらの収集資料を寄贈・売却し、さらに最晩年の1910年に絵画・写真・地図なども含む史料類を、無償で一般の参照利用に供するため設立されたホッ

ケン図書館に提供し、現在の同館の原型となった。展示施設では、それらのホッケンコレクションや同館の収集史資料、関連美術作品展示などが頻繁に開催されている(6b)。なお、同大学中央図書館にも貴重書展示区画のde Beer Galleryがある。

原則として火曜日～土曜日に無料開館している。

(7) ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂 New Zealand Sports Hall of Fame : 第5図(3)7a、(4)7b・7c

市内中心部のダニーデン駅駅舎(第3図b、第5図7a)2階北側にある、同国を代表するスポーツ博物館である。ヨーロッパ人のアオテアロアへの組織的入植150周年を記念して1990年に開館した。同国のスポーツで優れた活躍をした選手の関連資料を展示して栄誉を称えている。主要な国際大会から引退後5年以上経過していることが殿堂入りの資格とされる。最初に、国技ともいえるラグビーの展示が来館者を迎える(7b)。そして、地元ダニーデン出身で1952年のヘルシンキ・オリンピックでの女子走り幅跳び金メダリストのイヴェット＝ウィリアムズ(Yvette Williams)の競技を再現した展示が続く。日本開催を含む各回オリンピックで活躍した選手に関する展示も各所にある。また、同国で盛んなクリケットに関しても展示で大きく取り扱われる(7c)。サガルマータ(エベレスト)人類初登頂で著名なエドモンド＝ヒラリー(Edmund Hillary)に関する展示などもある。

入館料は大人6NZ\$で、原則として水曜日～日曜日に開館している。

(8) オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー — Dunedin Art Gallery, Otago Art Society : 第5図(3)8a・8b

市内中心部のダニーデン駅駅舎(第3図b、第5図8a)2階南側にある。1876年に同国で最初に設立された芸術家団体であるオタゴ美術協会の展示室である。同協会は、オタゴ地方における美術の研究・実践の振興を設立目的としている。1922年～1930年までは後述するダニーデン公共美術館(11)と一体



4a ダニーデン自然の不思議博物館正面



4b 同展示室



5a オルヴェストン歴史的邸宅



5b 同内部



6a オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー入口



6b 同展示室



7a・8a ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂・オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー入口



8b オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（3） ※筆者撮影

であったがその後分離した。1972年～2007年までは現在オタゴ博物館敷地内に組み込まれている旧北ダニーデン郵便局建物（現 HD Skinner Annex）を拠点としていたが、2007年から現在のダニーデン駅駅舎内に移転した。以前の会長を記念したショナ＝マクファーレンギャラリー（Shona McFarlane Gallery）で、歴代会員が制作あるいは寄贈した所蔵絵画コレクションの常設展示が行われている（8b）。他の展示室では、現会員の作品展などが開催されている。

原則として年中無休で無料開館している。

(9) ダニーデン監獄 Dunedin Gaol / Dunedin Prison : 第5図(4)9a・9b

ダニーデン駅前のダニーデン高等地方裁判所（第3図c）と隣り合うダニーデン監獄（旧ダニーデン刑務所）は、1898年に現在の建物が建設された（Martin 1998）。その後も増改築を経て2007年に刑務所としての役割を終えて閉鎖された。イギリスのロンドン警視庁（Scotland Yard）旧建物と似た中庭形式のヴィクトリア朝時代監獄建築としては希少な現存例とされる。現在はダニーデン刑務所慈善トラスト（Dunedin Prison Charitable Trust）が建物を管理し、文化財・博物館などとしての活用に向けた整備途中段階である（9a）。監獄内には、2007年当時まで使用されていた監房・通路仕切り檻・調理場・所員詰所などがそのまま残っている（9b）。特に19世紀末～20世紀前半頃の著名な囚人に焦点をあて、その各独居監房入口に解説案内板の設置が行われるなど、整備が進められている。当時の時代世相を反映した、ウィスキー密造者・著名な女性詐欺師・18歳の連続強盗犯などが解説対象となっている。同時に、「脱獄」を題材にした有料娯楽催事にも使用されている。

現在整備途中であるが、夏季（10月～4月末）土日に、事前予約制で大人15NZ\$のガイド付きツアー限定の公開を行っている。

(10) ダニーデン市図書館リードギャラリー

Reed Gallery, Dunedin City Library : 第5図(4)10

リードギャラリーは、かつて同国を代表する出版社の創業者であったアルフレッド＝リード（Alfred Hamish Reed）にちなむ。図書館3階の貴重書階に設けられた展示室である（10）。リードは、日曜学校用の書籍輸入などの会社をダニーデンで立ち上げ、やがてそれを基に甥とともに出版社を創業した。後年リード出版（Reed Publishing (NZ) Ltd）として知られる同国を代表する歴史・マオリ・自然・教育関係書籍の出版社となった。1975年に生涯を終えるまでダニーデンで暮らしたリードは、長年にわたり収集した中世の写本などを含む多数の貴重書コレクションを同館に寄贈した。2006年に開設されたリードギャラリーは、一般利用者が容易にそれらの文化遺産的史資料の見学を可能にするというリードの遺志を継いだものでもある。リードコレクション以外にも豊富な図書館所蔵貴重資料の中から特集的な課題を設定し、約4箇月ごとに展示替えが行われている。それらのなかには、20世紀後半の同国に多くの社会的影響を与えた芸術家で、市内（ポートチャルマース）在住者であったラルフ＝ホテレ（Ralph Hotere）の旧蔵書コレクションもある。

年末年始を除き、年中無休で無料開館している。

(11) ダニーデン公共美術館 Dunedin Public Art Gallery : 第5図(5)11a～11d

1884年に設立された国内最古の美術館である。ダニーデン在住の弁護士・画家であるウィリアム＝ホジキンス（William Mathew Hodgkins）の尽力により、最初は現在のオタゴ博物館3階の海事室部分に設立された（Entwisle 1984, Notman and Cullen 2009）。しかし、その後も現在のオタゴ入植者博物館本体建物など市内各所の建物を転々と移動し、最終的に1996年に現在地で再開館した（11a）。19世紀後半から現在までの同国の重要な芸術作品を収蔵している。なかでも、ウィリアム＝ホジキンスの娘でダニーデン出身のフランシス＝ホジキンス（Frances Mary Hodgkins）作品の充実したコレク



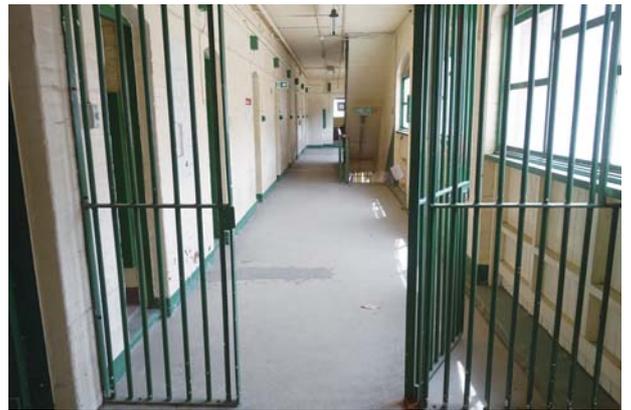
7b ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂展示室



7c 同展示室



9a ダニーデン監獄



9b 同内部



10 ダニーデン市図書館リードギャラリー



13 ブルーオイスターアートプロジェクトスペース入口



12a ファーストチャーチ遺産・ビジター室 (正面右奥)



12b 同展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(4) ※筆者撮影



11a ダニーデン公共美術館正面



11b 1階第6展示室



11c 1階第3展示室



11d 2階第4展示室



15a ダニーデンガス工場博物館全景



15b 同内部



A ウォールストリートモール内遺構展示



B 聖パトリック聖堂遺構露出展示

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(5) ※筆者撮影

ションで知られる。同国を代表する著名な画家の一人である。そのほかに、ヨーロッパの歴史的な絵画、ターナーやモネなどの著名画家の作品、さらには鈴木春信や安藤広重など近世日本の浮世絵版画も多数所蔵している。絵画以外の装飾芸術作品も体系的に収集している (Entwisle 1990, Notman and Cullen 2009)。

1階の第2～7展示室では、ヨーロッパの歴史的絵画も含みながらも、在来のマオリ文化とさまざまな新来の文化の合流を象徴的に表現する作品展示が行われている (11c)。それらのなかには、オタゴ地方の先史時代の岩絵に着想を得た作品 (11b) もある。2階の展示室は、期間限定の企画展示が多く、絵画以外にも写真・映像作品やインスタレーションアート (installation art) 作品も多い。なかでも、南島マオリのカイ=タフ (*Kai Tahu, Ngai Tahu*) 支族の神話に着想を得たゾーイ=ホール (Xoë Hall) 氏の細い通路両壁面全面に描かれた壁画芸術 (mural art) 作品 (11d) は目を引く。子供向けの芸術体験室なども充実している。

クリスマスを除き、年中無休で無料 (任意寄付制) 開館している。

なお、国内主要都市と同様にダニーデン市内も壁画芸術が盛んで、市内在住邦人画家の青島江龍氏の作品もある。

(12) ファーストチャーチ遺産・ビジター室

Heritage and Visitors' Centre (Moray Hall), First Church of Otago : 第5図(4)12a・12b

オタゴ第一教会は、スコットランドからの自由教会入植団の到着と同時に創設された市内最初のキリスト教会の系譜を受け継ぐ。ダニーデン中心部の都市建設過程の支障であった丘 (Bell Hill) を大幅に削平した場所に、尖塔が特徴的なゴシック様式の巨大な教会堂が1873年に建設された (Salmond 1983) (12a)。その主祭壇背後に付属する礼拝室モーレイホールに1998年に開設された展示室である (12b)。ダニーデン中心市街建設の歴史と重なる同教会の歴史が、多くの関連資料とともに展示されている。ス

コットランド入植団の宗教指導者トーマス=バーンズ (Thomas Burns) 牧師や、入植団を1848年にダニーデン (ポートチャルマース) まで運んだ2隻の船ジョン=ウィクリッフ (John Wickliffe) 号とフィリップ=レイン (Philip Laing) 号の乗船者のことなどが詳しく紹介されている。

夏季の月曜日～金曜日に無料開館している (冬季休業)。

(13) ブルーオイスターアートプロジェクトスペース Blue Oyster Art Project Space : 第5図(4)13

実験的で革新的な芸術活動実践を支援するための芸術家自身が運営するアートスペースとして、国内でもっとも早い1999年に設立された (13)。さまざまな新進気鋭の芸術家と作品を紹介し、あわせて現代美術に関する議論の場を提供することも目的としている。なお、すぐ西側に隣接して、同様に主として現代美術作品を展示する画廊 (Milford Galleries Dunedin) もある。

火曜日～土曜日に無料で公開している。

(14) オタゴ入植者博物館 (Toitū Otago Settlers Museum) : 第5図(6)14a～14h

オタゴ博物館とならぶ市内でも最大級の博物館である。国内最古級の歴史博物館でもある。正式名称は、マオリ語地名で現在は暗渠化しているトイトゥ (*Toitū*) 川の名を冠している。ヨーロッパ人到来以前からマオリがこの付近を船着き場として使っていた長い歴史と博物館の性格を重ねている。オタゴ州設置60周年を記念して、オタゴ入植者協会が1908年に創設した。開館当初は、19世紀後半のスコットランドからの集団入植とゴールドラッシュ頃までを対象とし、名称もオタゴ初期入植者博物館 (Otago Early Settlers Museum) であった (Hinds ed. 1987)。開館当初の正面入口も現存する (14b)。しかし、その後も1922年に増築、1927年にはダニーデン公共美術館の旧展示室部分も同館に組み込まれた。さらに、1990年代には隣接するニュージーランド鉄道道路局の建物も同館の展示空間となり、2012年に正面

入口部分を含む現在の展示室がすべて完成した。もっとも北側にある船の舳先を意識した斬新な建物が現在の正面入口である (14a)。北東の入口部分から南西の出口付近まで、長さ約250mにおよぶ長大な博物館である。展示室はすべて1階のみであるが、広大な床面積に比例して展示室も数多い。ヨーロッパ人到来以前の地域のマオリ社会から、現代のダニーデン市に至る歴史が展示対象となっている。現在は、ダニーデン市が管理運営している。

展示室は14の主題で分けられている (Read and Brosnahan 2019)。最初の展示室では、「北島からのマオリの移住 (*Ara-i-te-uru*)」(14c) と、「マオリとヨーロッパ人の最初の出会い (Early Encounters)」が、取り扱われる。前半の主題は、オタゴ地方・南島マオリの代表的なカイ=タフ支族先祖の伝承上の舟アライテウル号にちなむ。北島より南島オタゴ地方に移住してきたとされるマオリ諸支族とその子孫が紹介され、復元住居などがジオラマ展示されている。また、捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者としてやってきた初期のヨーロッパ人 (*Pakeha*) とマオリが協業した捕鯨舟や鯨油煮出し用大釜 (try pot) などの暮らしぶりも示される。

続く展示室は二手に分かれる。左正面は「ゴールドラッシュ (Gold, Gold, Gold) 室」で、右手に進むと、「スミスギャラリー (Smith Gallery) 室」に入る。スミスギャラリー室は、膨大な数の初期入植者の肖像画・肖像写真が四方の壁全面に掲げられた同館開館以来の重要な象徴的空間である (14d)。その先には、「新エジンバラ (New Edinburgh) 室」(14e) と、「衣装文化 (Material Culture) 室」が続く。新エジンバラ室では、スコットランド集団入植団の初期の生活状況が、木小舞と泥塗壁造りの住居 (wattle and daub cottage) とともに再現展示されている (14e)。「衣装文化 (Material Culture) 室」では、19世紀末以降の入植者の様々な生活場面の衣装が並ぶ。それらのなかには、中国などヨーロッパ以外の移民の伝統衣装も含まれる。

「ゴールドラッシュ (Gold, Gold, Gold) 室」は、展示室中央の巨大な馬車の象徴展示が目を引き (14f)。

オタゴ地方のガブリエルズ溪谷 (Gabriel's Gully) の金鉱に殺到する出稼ぎ労働者とダニーデンを結ぶ駅馬車を表現している。その近くには、清代末期の中国からの移民労働者に関する展示がある。現在の中国広東省広州市番禺 (番邑) 出身で、19世紀末のダニーデンを代表する華僑商人であった徐肇開 ("Charles" Choie Sew Hoy) について取り上げている。最初は鉄くずや乾燥キクラゲなどを中国ほかに輸出し、その帰りの船で広東産の高級家具や絹などを輸入した。それらの輸出入で得た資本を基に川底を大規模に浚渫する砂金採掘工法を新たに導入して成功を収めた。

また、近代都市ダニーデンの考古学的調査を詳しく取り上げた展示区画 (14f 右端) がある。市街地中心部の百貨店ウォールストリートモール建設工事に伴う2008年の発掘調査成果である。19世紀後半から谷や湿地を埋めてほしいに市街地整備が進む変遷過程が、各種の出土遺物や検出遺構とともに詳しく紹介されている。

さらに、渡航時に移民が乗船した暗く狭い船室内の状況が再現された「大海原を越えて (Across the Ocean Waves) 室」もある。「国内初の大都市 (First Great City) 室」では19世紀末の華やかな都市の発展のみでなく、先進的なガス灯街路の陰にあった歴史にも目を向ける。たとえば、不衛生なスラム街や犯罪、薬物・アルコール中毒・売買春・ギャンブル・育児放棄などである。また、同時期にダニーデン監獄 (現存建物の前身時期) に収監され、市内で強制労働させられた北島タラナキ地方のマオリについても紹介する。イギリス植民地権力による土地侵奪に対して、非暴力・不服従抵抗運動を組織指導したテ=フィティ=オ=ロンゴマイ3世 (*Te Whiti O Rongomai III*) やトフ=カカヒ (*Tohu Kākahi*) などに関する小展示 (14g) も重要である。

ここまでの展示室がほぼ開館初期からの建物内であったが、続く展示室は1939年完成のアールデコ (Art Deco) 様式建築である旧ニュージーランド鉄道道路局バス乗降場建物とその接続部を利用している。



14a オタゴ入植者博物館正面



14b 同旧正面



14c 同先住マオリ文化展示室



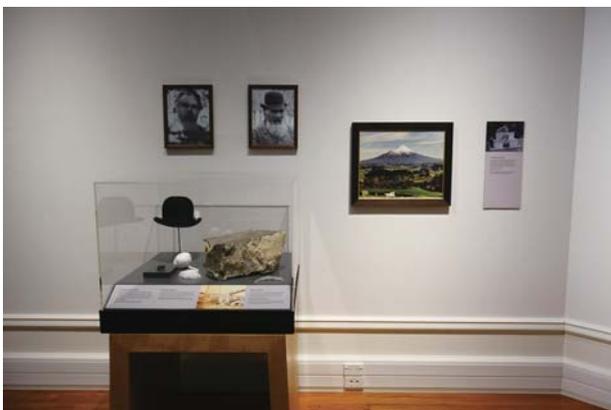
14d 同スミスギャラリー室



14e 同スコットランド人入植者展示室



14f 同ゴールドラッシュ展示室



14g 同植民地期強制労働マオリ人関連展示



14h 同地域の車両変遷展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(6) ※筆者撮影

最初は、「戦争（Call to Arms）室」である。ヨーロッパ系とマオリ系の兵士が激戦地（トルコ・ガリポリ）で生死をともにしたことで事実上の「ニュージーランド国民」創出につながった第一次世界大戦など、同国が関与した諸戦争についての厳粛な展示がある。「20世紀（Twentieth Century）室」では、馬車から路面電車への変化や、多様な生活器具の急激な変化が示される。「放送文化（Dunedin on Air）室」では20世紀のラジオ・テレビ放送開始の状況が語られ、「芸術文化（Creative Dunedin）室」ではダニーデン発の音楽や美術の流行を伝える。そして、最後の広大な展示室に入る。最初は「ダニーデンのデジタル化（Dunedin Goes Digital）室」で、1960年代以降のデジタル化の発展をコンピューターの形の変化で明かされる。最後は、同館のもっとも印象的な展示室の一つである「オタゴ自動車（Otago Motors）室」（14h）である。20世紀最初の自動車の導入と「オタゴ自動車クラブ」の設立、バスや消防車などの変化を多数の実物車両で紹介している。なお、この展示室からの出口は、隣接する中国式庭園「蘭園（Lan Yuan）」（有料）入口にも通じている。同園は、ダニーデンへの中国系移民の貢献を記念して姉妹都市の上海市の協力で作庭された庭園である。

クリスマスを除き年中無休で、無料（任意寄付制）開館している。

(15) ダニーデンガス工場博物館 Dunedin Gasworks Museum：第5図(5)15a・15b

南ダニーデン地区の町工場や商業施設が密集する一画にある。平面六角形の古風なレンガ積み煙突が目印的存在である。1863年～1987年まで操業していた同国最古かつ最後のガス工場の博物館である。世界的にも希少な20世紀初期のガス工場遺構現存例として国内屈指の重要な産業遺産とされ、早くから保存整備活用計画が策定されていた（Hinds 1986）。1988年にダニーデンガス工場博物館トラスト（Dunedin Gasworks Museum Trust）が設立され、2001年に開館した。現在は、当初の工場敷地の約5

分の1が博物館として保存活用されている。

同工場のおもな役割は、ガス製造（gas manufacture）・ガス精製（gas treatment）・ガス供給（gas pumping）・ガス貯蔵（gas storage）であった。19世紀後半のダニーデンでは、ゴールドラッシュに沸き昼夜を問わずに交通や移動が盛んになった。そこで、ダニーデン市街地街路の夜間照明の必要性から、街路灯への都市ガス（town gas）とも呼ばれる石炭ガス（coal gas）の供給が、最初の重要な業務となったのである。最初の社名は、ダニーデンガス灯・コークス有限会社（The Dunedin Gas Light and Coke Company Limited）であった。その後、LPGガスの普及に伴い1987年に一般供給を停止し、1990年にガス生産も完全終了した（Dunedin Gasworks Museum 200-?, Wrigglesworth 2022）。

現在は、1907年に建設されたエンジン室・ボイラー室・煙突などのレンガ積建物や、ガス貯蔵タンクの鉄支柱列（gasholder）が残る（15a）。エンジン室内部（15b）の特に蒸気エンジン機械設備は、操業初期の例を含めて良好な状態をとどめており、見学者に作動実演も行っている。

入館料は大人5NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(16) モーニントンケーブルカーハウス・展示

Mornington Cable Car House and Display：第5図(7)16

中心市街と西側急坂上のモーニントン地区を結んでいた1883年開通・1957年廃止のケーブルカーを保存展示するために、2018年に完成した仮設展示保管施設である。ダニーデン文化遺産路面電車トラスト（The Dunedin Heritage Light Rail Trust）が管理運営し、将来的に「動く歴史的文化遺産」および観光活用のための路線復活と、恒久的な博物館施設建設を目指している。現在、倉庫形の建物内に当時のケーブルカー車両2台が保存され、運行当時の備品や関連写真などが展示されている（16）。

日曜日にものみ無料で開館している。

(17) オーシャンビーチ鉄道 Ocean Beach Railway : 第5図(7)17

南ダニーデン地区最南端の海岸近くにある同国最古の保存・運行活用型鉄道博物館である。1961年に創設され、現在オタゴ鉄道・機関車協会 (Otago Railway and Locomotive Society) によって管理運営されている。多数の歴史的な鉄道・機関車車両を保管しているが、それらの一部を約900m 走行運用・体験乗車できることが最大の特色である。受付を兼ねた旧待合所建物内に、簡単なパネル展示がある。保有する車両は、運行可能な国内最古の1873年製造蒸気機関車 A67をはじめ、1872年に製造されダニーデンとその外港のポートチャルマース間を走行していた鉄道車両の台枠など多数である。

入館 (体験乗車) 料は大人 3 NZ\$ で、原則として夏季の日曜日のみ開館 (運行) している。

(18) ラーナック城 Larnach Castle : 第5図(7)18a・18b

同国で唯一の「城館」ともいわれるオタゴ半島中央にある19世紀後半の城館風邸宅である。城館本体の建築様式は、新ゴシック様式の塔とコロニアル様式の外縁回廊を組み合わせたヴィクトリア朝様式である (18a)。実業家で政治家のウィリアム＝ラーナック (William J. M. Larnach) が、ヨーロッパから職人も招き1871年に着工し、1874年にラーナック家が居住を開始し、1887年に内装や付属の舞踏室を含むすべての建物が完成した。当時の邸宅の愛称は「キャンプ (The Camp)」であった。事業の失敗などが理由でウィリアム＝ラーナックが国会内で1898年に自殺した後、邸宅と所有地は相続争いの対象となった。1907年のラーナック家による邸宅売却前後には、内部の家具調度品は散逸していた。その後一時期、政府所有の精神病院となり、第一次世界大戦の戦争神経症 (shell shock) 帰還兵の療養に使用された。所有者はその後さまざまに変遷し、しだいに荒廃していったが、外観は当初の姿をほぼ保っていた。そして、1967年以来バーカー (Barker) 家の所有となり、ラーナック家時代を意識した城館内の

修理復元と周囲の庭園の整備公開活用が行われるようになった (Barker and Barker 2019)。

現在の城館建物本体1階は、ラーナック家記念室や「武器庫」があり、ウィリアム＝ラーナック関係資料が展示されている。正面階段上の2階は、正面玄関や「音楽室」(18b)のほかに、「客間」・「食堂」・「朝食室」・「図書室」がある。3階・4階には、「寝室」・「子供部屋」・「乳母部屋」・「浴室」や、物見塔昇降口や胸壁内側に通じる階段がある。2024年9月現在修理中箇所が多い。2・3・4階の各部屋では、収集・復元されたラーナック家時代の家具調度品類が多く展示されている。

入館料は大人45NZ\$で、クリスマスを除き年中無休で開館している。

ちなみに、ダニーデンにはもう一つの城館風邸宅として「カーギル城 (Cargill's Castle)」(第3図f)がある。現在廃墟化しているが、復元整備計画も検討されている。そのほかにも、富裕層の大規模邸宅では、前述の市内中心部のオルヴェストン歴史的邸宅(5)がある。また、現在公開の有無を確認できなかったため本稿では取り上げなかったが、ラーナック城に近いオタゴ半島中央の湾岸部に、保存活用されている富裕層の別荘住宅がある。現在同国最大の建設企業創業者のジェームス＝フレッチャー (James Fletcher) が、その最初の請負業務として1909年に建設した通称「フレッチャー住宅」(Fletcher House: 727 Portobello Road, Broad Bay, Dunedin 9014)である。内部の家具調度品類は、オタゴ入植者博物館の協力により20世紀初頭の雰囲気再現されたという (Shaw 1992)。

(19) オタゴ半島博物館 Otago Peninsula Museum : 第5図(7)19a~19d

オタゴ半島中央にあるポートベッロ (Portobello) 地区の郷土博物館である。地域のオタゴ半島博物館・歴史協会 (Otago Peninsula Museum and Historical Society) の有志により管理運営されている。地区の古写真集成など研究成果刊行 (Otago Peninsula Museum and Historical Society ed. 2023, Dunn and



16 モーニントンケーブルカーハウス・展示



17 オーシャンビーチ鉄道



18a ラーナック城正面



18b 同内部



19a オタゴ半島博物館正面



19b 同マオリ文化・入植初期展示室



19c 同移設19世紀家屋内展示



19d 同移設歴史的建造物・野砲展示

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（7） ※筆者撮影

Cameron 2023)にも意欲的である。入口にあるドーム状の旧サウンダーズ岬灯台灯籠部分が目印となっている(19a 右端)。1974年に、地区内のコロネーションホール(ジョージV世国王戴冠記念会館)内の小部屋で行った展示が原型である。その後1986年に、現在の場所に独立した展示室・事務室を設けて再開館した。ポートベック地区を中心とする19世紀以降のオタゴ半島入植者の歴史や海難事故に関する展示が多い。地域で採集された磨製石斧などの考古資料や、地域のマオリ文化に関する資料も少数展示している(19b)。同館の最大の特色は、地域の歴史的建築物・記念物を敷地内に数多く移築保存展示していることである。19世紀の移築木造住宅内では、当時の生活状況を再現展示している(19c)。また、第一次世界大戦時の戦利品であるドイツ製野砲、ポートベック派出所にあった20世紀前半の留置所、後述するタイアロア要塞にあった第二次世界大戦時のレーダー監視哨などが、覆屋内で密に展示されている(19d)。

入館料は大人2NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(20) ニュージーランド海洋研究センター(オタゴ大学海洋科学部) New Zealand Marine Studies Centre, Department of Marine Science, University of Otago: 第5図(8)20

オタゴ湾に突き出たポートベック小半島の先端にある。研究教育用展示施設を備えたオタゴ大学の海洋生物研究機関である(20)。海洋生物に関する感知操作式の各種学習機器や、食物連鎖・種別分類やその特徴を観察できる水槽展示、潜水艇を再利用した仮想海中探査体験映像展示などがある。

原則として地域の学校単位児童・生徒や団体限定で、事前予約制の展示活用教育プログラムが有料で用意されている。

(21) オタクウ記念メソジスト教会博物館 Otakou Memorial Methodist Church Museum: 第5図(8)21

オタゴ半島先端部・オタゴ湾口に近いオタクウ地区にある。同地区マオリ伝統文化の祭儀場(Otakou

Marae)内にあるキリスト教教会内博物館である。この場所が地域のマオリ首長により祭儀場に定められたのは1859年のことで、北島マオリ文化系の豪壮緻密な装飾が施された教会建築は1941年に建設されたものである。その教会建物内の前室部分が博物館となっている(21)。地域ゆかりの各家伝来の絵画・写真などを含む貴重な史資料を多数保管展示しており、ダニーデン周辺のマオリ文化に関する最重要資料を所蔵する博物館である。貴重史資料の一部は、オタゴ大学ホッケン図書館に管理委託してある。また、地域で採集・伝来・寄贈された考古資料(軟玉・鯨骨製威儀具 *Mere Pounamu*, *Patu*、磨製石斧、銛先・釣針などの骨器類、黒曜石片など)や、近隣のサンドフライ湾(Sandfly Bay)遺跡出土遺物も数多く展示されている。それらのなかには、最初期のモア狩猟期の糸巻(reel)形骨製品が1点含まれていることも注目される。

原則として一般非公開である。

(22) ロイヤルアルバトロスセンター Royal Albatross Centre: 第5図(8)22a~22d

オタゴ湾口のオタゴ半島先端プケクラ *Pukekura* (タイアロアヘッド *Taiaroa Head*) の自然保護区域内に1989年に開設されたビジターセンター・展示施設である(22a)。オタゴ半島の動植物保護・育成を目的としたオタゴ半島トラスト(Otago Peninsula Trust)によって運営されている。ダニーデンを代表する観光名所としても知られる。周辺一帯には、キタシロアホウドリ(Northern Royal Albatross)・コガタペンギン(Blue Penguin)・キンメペンギン(Yellow-Eyed Penguin)などの希少な営巣地がある。また歴史的にも、マオリ時代のプケクラ城(*Pukekura Pa*) 伝承地、第一・二次世界大戦時のタイアロア要塞(Fort *Taiaroa*) などの重要な文化財がある。同センターは、それらに関するガイド付き見学ツアーのビジターセンター・展示施設である。センター内では、最初にこのプケクラ地域のマオリ文化の歴史に関する紹介がある(22b)。そして、アホウドリなどの地域の希少生物に関するジオラマ・



20 ニュージーランド海洋研究センター遠景



21 オタクウ記念メソジスト教会博物館（正面左端）



22a ロイヤルアルバトロスセンター正面



22b 同展示室



22c 同展示室



22d タイアロア要塞砲台遺構

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（8） ※筆者撮影

映像などの展示が続く（22c）。そして最後に、第一次世界大戦時のロシア帝国・第二次世界大戦時の日本帝国の侵攻に備えて構築された砲台などの要塞施設に関して解説展示がある。同センターが拠点となって、アホウドリ・ペンギンなどの観察ツアーや、1886年製のアームストロング6インチ隠頭砲（Armstrong 6-inch Disappearing Gun）砲台（22d）・営倉などの要塞遺構見学ツアーが行われている。

センターの展示は年中無休・無料で見学可能であ

るが、自然・要塞遺構見学ツアーは事前予約制で有料である。

（23）ポートチャルマース海事博物館 Port Chalmers Maritime Museum：第5図(9)23a～23d

ダニーデンの重要な外港ポートチャルマースの海運と町の歴史を主題とする博物館である。ポートチャルマース歴史協会が運営している。1877年に建設された旧ポートチャルマース郵便局建物が本館

で、2024年に新しいオタゴ港管理局建物1階に接続して新展示室が設けられた(23a)。

本館展示室中央では、1875年にダニーデンで創業し世界と結んだユニオン蒸気船会社(Union Steam Ship Co.)が大きく取り扱われる(23d)。ポートチャルマースー帯がコプタイ(Koputai)と呼ばれていたヨーロッパ人到来以前のマオリ文化についても、周辺出土の磨製石斧類とともに簡単に解説される。19世紀末以来の町の商工業の発展とダニーデン市街との鉄道輸送に関する資料も豊富である(23c)。また、港湾労働者の労働運動とその達成、近隣のアラモアナ(Aramoana)海岸でのアルミニウム精錬工場建設計画を撤回させた同国初の反公害運動(1974~1981年)の高まりなども詳しく紹介されている。新展示室では、ポートチャルマース歴史協会所蔵の多数の船舶模型などが象徴的に展示されている(23b)。

クリスマスと元日を除き年中無休で、無料(任意寄付制)開館している。

(24) ワイコウアイティ海岸遺産センター Wai-kouaiti Coast Heritage Centre : 第5図(9)24a~24d

市の北部にあるワイコウアイティ地区の郷土博物館である。オタゴ大学などの研究者の協力を得ながら、地域の有志により運営されている。1869年建設の旧ニュージーランド銀行建物を母体に、2021年に展示・収蔵機能に特化した新館が増築された(24a)。ワイコウアイティは、ダニーデンや同国の植民地時代初期に関連する重要な歴史的文化的文化財が多数残る地域である。在来のマオリ社会にヨーロッパ系(Pakeha)の捕鯨者・アザラシ(海獣)猟者が混住しはじめ、そこに参入したジョン=ジョーンズ(John JonesまたはJohnny Jones)がやがて本格的な入植地農園開発などをこの地で行った。同館は、地域の入植者子孫各家に伝来した史資料や考古資料などを合計19,000点以上所蔵し、その一部を展示している(24b・24c)。磨製石斧・石刃・骨製品(鯨骨製威儀具・鉞・釣針など)などの先史時代資料は、同館周辺のほかに南島各所からの採集・寄贈資料も多い。

そのなかにはモア狩猟期の非常に大形の有柄磨製石斧なども含まれる。また、新館建設に先立つ発掘調査で出土した19世紀後半の陶磁器・ガラス製品類も少量展示されている。

新館に隣接して同館が保存管理している旧ニュージーランド銀行建物は、1階の窓口部分(1869年完成)(24d)・2階の支配人家族居室などの内装が1927年頃の旧状を保っている。2024年現在外壁の保存修理工事が行われている。

水曜日~日曜日に無料で開館している。なお、旧ニュージーランド銀行建物内は、大人5NZ\$のガイド付きツアーでのみ見学可能である。

同館近隣には、後述する国内現存最古の農場建物であるマタナカ農場(25)や、南島南部(オタゴ・サウスランド地方)で現存最古のキリスト教教会建築といわれる1858年建設の聖ヨハネ福音伝道者教会(St John the Evangelist Church)もある。

(25) マタナカ農場 Matanaka Farm : 第5図(10)25a・25b

マタナカ農場は、ワイコウアイティ北側の見晴らしの良い海岸崖上牧草地内にある。国内現存最古の1840年代にさかのぼる農場建築で、同国を代表する重要な歴史的建築物である。実業家のジョン=ジョーンズ(John JonesまたはJohnny Jones)が南島南部各地での捕鯨権を入手する過程で、1840年からワイコウアイティでの農園開発を開始した。南島東海岸におけるヨーロッパ人の最初の組織的入植事例とされる。現在、北から順に馬小屋(Stable)(25b)、後世の木造倉庫1棟を間において、穀倉(Granary)・厠(Privy)・教室(School)の4棟の建物が現存する(25a)。馬小屋から厠までは、主軸が南北方向で、教室のみ主軸が東西方向である。いずれもオーストラリア製の建材を輸入して組み立てた1840年代の建築と推測されている。屋根は、亜鉛-錫メッキで保護されたブリキ材葺きである(Knight and Coutts 1975)。旧教室建物内前室に詳細な解説パネル展示があり、穀倉内の捕鯨舟・馬小屋内の鞍などとあわせて、建物内を見学可能である。



23a ポートチャルマース海事博物館正面



23b 同展示室



23c 同展示室



23d 同展示室



24a ワイコウアイティ海岸遺産センター正面



24b 同展示室



24c 同展示室



24d 旧ニュージーランド銀行建物内部

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（9） ※筆者撮影



25a マタナカ農場



25b 同馬小屋内部



26 タイエリ歴史協会・博物館
 ※出典 <https://www.kotuia.org.nz/organisation-pages/org-page-3185/>
 第5図 ダニーデン市周辺の博物館(10) ※25筆者撮影



27 ストラスタイエリ歴史博物館(ミドルマーチ博物館)
 ※出典 <https://www.facebook.com/middlemarchmuseum/>

8月12日～10月1日(羊出産・育児期間)を除き
 年中無休で、無料で公開されている。

(26) タイエリ歴史協会・博物館 Taieri Historical
 Society and Museum : 第5図(10)26

今回は現地調査できなかった。アウトラム(Out-
 ram)地区のタイエリ川に面した公園内にある。
 1970年に設立されたタイエリ歴史協会・博物館に属
 する地域の有志によって運営されている。おもにア
 ウトラム地区の旧裁判所・留置所・学校・教会・蒸
 気機関車庫などの歴史的建築を移築した歴史公園と
 なっている。それらの建物内に、同地区の歴史的な
 農機具・台所用品・家具・写真・肖像画・衣類・史
 料を展示している。

入館料は大人4NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(27) ストラスタイエリ歴史博物館(ミドルマー
 チ博物館) Strath Taieri Historical Museum (Middle-
 march Museum) : 第5図(10)27

今回は現地調査できなかった。現在は廃線となっ
 た旧オタゴ中央鉄道(Otago Central Railway)ミド
 ルマーチ駅のミドルマーチ地区にある。ストラスタ
 イエリ歴史協会に属する地域の有志によって運営さ
 れている。おもな収蔵・展示資料は、地域の歴史的
 な農機具類・台所用品・オタゴ中央鉄道関係資料・
 第一二次世界大戦関係品・各種史料類などである。
 先史時代関係では、珪質岩(silcrete)製の石器類・
 モアの骨などがある。そのほかに、ゴールドラッ
 シュ時の中国人労働者関係資料や、川底での砂金採
 取に1873年から使用された「カモノハシ(platypus)」
 と呼ばれる潜水探査器具も代表的展示資料である。

入館料は大人2NZ\$で、原則として10月～1月は
 金曜日～日曜日・2月～4月は水曜日～日曜日開館
 である。

(A) ウォールストリートモール内遺構展示

Wall Street Mall : 第5図(5)A

中心市街地にある百貨店ウォールストリートモール建設に先立つ2008年の発掘調査で、19世紀のダニーデン都市発展過程各段階の遺構が検出された。なかでも注目されたのは、地表下約130cmから発見された湿地をまたぐ丸太道 (Corduroy Causeway) 遺構である。出土遺物と層位から都市ダニーデン建設最初期の1850年代頃の遺構と考えられる (Petchey 2009)。スコットランドからの集団入植最初期・ゴールドラッシュ以前に「泥濘^{ぬかるみ}のエジンバラ (Mudedin)」と評された時期のダニーデンの状況を如実に示す非常に貴重な遺構である。そこで、出土した構成材を保存処理したうえでほぼ原位置に丸太道の一部を復元し、ウォールストリートモール屋内の小広場床面の一部を透過素材とし、その復元遺構を観察できるようにしている (A)。なお、この遺構と周辺出土遺物は、近くのおタゴ入植者博物館 (14) の「ウォールストリートの幻影 (The Ghosts of Wall Street)」と題した展示区画 (14f 右端) でかなり詳細に取り上げられている。

ウォールストリートモール営業時間中は、いつでも無料公開されている。

(B) 聖パトリック聖堂遺構展示 St Patric's Basilica : 第5図(5)B

南ダニーデン地区中心部にあるカトリック教会である。ダニーデンガス工場博物館 (15) のすぐ近隣でもある。1878年に聖パトリック教会学校が設置され、それを基に聖パトリック聖堂が1894年頃に完成した。その後も、聖堂内やその周囲建物の建設工事が続き、聖堂西南側には1896年頃に司祭館が建設された。しかし、これらの建築に耐震強度や防災上の課題があったため、改修補強や撤去が必要になった。事前に一部発掘調査を伴う建築考古学的記録保存調査が実施されることになったのである。2013年に完全撤去された司祭館は、発掘調査と史料調査の結果、多次にわたる増築過程が確認された (Cawte et al. 2018)。そこで、最初期第1段階の建築基礎遺構の

み保存整備され、現在聖堂横の旧司祭館跡緑地内に原位置で露出展示されている (B)。

一般道路に面した開放緑地部分のため、いつでも無料公開されている。

(C) モンテレイ博物館 Monterey Museum

ダニーデン市北側の北オタゴ地方カティキ (Katiki) 地区に関するすでに閉館した総合博物館である。マイケル＝トロッター (Michael Malthus Trotter) 氏が少年時代の1951年に自宅に開設した博物館であった。トロッター氏は、後年南島クライストチャーチ市のカンタベリー博物館を拠点に、アオテアロア考古学を主導した。タイプ打ち・手彩色挿絵入りの展示解説小冊子 (Trotter 1951?) も当時刊行されている。それによれば、おもに氏自身が同地区周辺で調査・採集した考古資料・歴史史料や、貝類・昆虫などの生物標本・古生物化石・岩石鉱物が展示されていたようである。ダニーデン周辺の多くの歴史系郷土博物館と異なる総合博物館型の事例であったといえる。

III. まとめ

アオテアロア国内主要都市の博物館に関して、本稿と同様の観点の調査研究が無いと厳密な比較は難しいが、ダニーデン市の博物館数または人口比に対する博物館数は、国内最多水準とみられる (註4)。また、博物館の種類別でも、最古または最古級の事例が多い。ダニーデンは、あきらかに「博物館都市」といえるほど博物館文化が根付いた都市といえる。

このように非常に多数の博物館が集中して存在する要因は、歴史的・社会的に複合的と考えられる。近代的な博物館が普及拡充した19世紀後半のイギリス・ヴィクトリア朝期に植民地化が進んだことは、重要な時代的背景といえる。しかし、これはアオテアロア全域や他のイギリス植民地系諸国に共通の要素である。地域固有の事情としては、1861年からのダニーデン・オタゴ地方のゴールドラッシュも無視

できない。急激な人口増加を受けた産業発展が、文化的な都市基盤整備を進めるうえで財政的な裏付けになったことは間違いない。しかし、これも同様に急激な産業発展・都市形成が起きたすべての場所に共通するわけではない。その点で、ダニーデン固有の歴史的背景として、入植者の基礎部分を占めたスコットランド自由教会の集団入植が重要である。特にゴールドラッシュ以降の移民増加を受けて、スコットランド系の入植者が教育・文化などの社会基盤整備を重視したことが指摘されている (Summerhayes and Hayakawa 2023)。そして、このような歴史的経緯を経て、オタゴ博物館などの初期の博物館が誕生している。

ダニーデンでは、オタゴ博物館以後も、現在まで多くの新たな博物館が誕生している。これは、ダニーデンの地域社会における文化の表現伝達手段として、世代を超えて「博物館」・「展示」という手法が広く根付いた状況を示すともいえる。そして、博物館側も変化する社会の需要に対応している。たとえば、オタゴ入植者博物館は、設立経緯として、特にスコットランド系入植者の歴史中心の博物館であった。しかし、時代の変化に対応して、ゴールドラッシュ以後の他地域からの入植者も展示対象に含めた。そして21世紀には、在来のマオリ社会についても大きく取り上げ、はじめてオタゴ地方への人類「入植者」の歴史すべてを包括する博物館になった。また、地域の歴史系郷土博物館の主要な活動で、先祖に関する家系 (genealogy) 調査依頼への協力対応が目立つ。ヨーロッパ系入植者子孫関係者の先祖や出身地に関する幅広い興味関心に応じるためである。マオリ社会では、一般的に先祖と一族の系譜 (*whakapapa*) が熟知されていることも広く知られている。あるいは、こうしたマオリ社会の文化慣習が、ヨーロッパ系入植者子孫に一定の影響や刺激を与えた可能性もあるように考えられる。

このようにダニーデンの博物館は、現代社会におけるマオリの復権に代表されるアオテアロアの多文化主義政策に対応した変化がみられる。植民地化によって深刻な被害を受けたマオリの復権は、1840年

のワイタング条約 (*Te Tiriti o Waitangi*) に基づくこの国の統合性を維持するための根本的課題である (Charters 2009)。博物館におけるマオリ文化の位置づけや展示についても、最近「脱植民地化 (decolonization)」が大きな課題になっている (村田 2020、土井 2023・2024)。近年の博物館におけるマオリ文化の展示は、地域のマオリ社会との対話や理解が不可欠である。オタゴ博物館やオタゴ入植者博物館の現在の展示でも同様の手順で改善が行われており、今後もさらに深化させていく必要がある。

そのような問題意識に基づくと、たとえば考古学・歴史学の観点からは、現在のマオリ文化の展示にまだ残された大きな課題を識別できる。それは、マオリ文化の展示では、19世紀以降の民族誌的記録や文化人類学的観点、および神話伝承的世界観が主軸となっていることである。そこに、たとえばはるかに古い12世紀頃以降の各時期の考古資料が組み込まれる例も少なくない。その逆に、19世紀以降のヨーロッパ系入植者の展示では、文化人類学的観点も故郷の神話伝承的世界観に基づく解釈もほぼ適用されていない。ヨーロッパ人が到来した植民地期以後の展示は、社会の歴史的展開が主軸・前提になっている。これは、特に一般の見学者に対して、循環・固定的な社会と躍動・変革的な社会の違いという誤解や先入観を与え続けている可能性がある。しかし、考古学の調査研究成果では、ヨーロッパ人到来以前のアオテアロアの人類社会にあった文化変遷や地域性が確認されている。現在伝わるマオリの神話伝承的世界観もまた歴史的な産物である。ヨーロッパ人到来以前のマオリ社会にも、明らかに複雑な歴史的展開過程が存在したのである。考古学的研究成果に基づくマオリ社会の「歴史の回復」も、今後の博物館展示における脱植民地化の大きな課題といえる。

これに関連して、野外博物館にも課題がある。ダニーデンにおける歴史的建築や発掘調査で検出された遺構を展示活用している例を複数紹介した。そのいずれもが、19世紀以降のヨーロッパ人到来後の事例である。ダニーデン以外の地域も含めて、原位置

の遺跡遺構を活用したマオリ文化関連の野外博物館の事例は非常に少ない。これは、アオテアロアにおける人類の長い歴史を反映していない偏った状況である。マオリ文化の考古学的遺跡の整備活用には、現在のマオリ文化における各種禁忌 (*Tapu*) への尊重対応課題がある。しかし、これも歴史的な観点から、特に埋葬遺跡を除く19世紀以前の考古学的遺跡については、いったん禁忌対象とは区別することも検討の余地があると考えられる。地域のマオリ社会との対話や理解あるいは主導のもとに、可能な範囲で遺跡遺構の復元整備活用を行うことは、視覚的にも明らかなアオテアロアの歴史の回復と脱植民地化に寄与すると考えられる。

謝辞

本稿執筆にあたり、筆者の在外研究滞在（2024年9月～2025年8月）を受け入れていただき、各種ご教示と研究上の便宜をはかっていただいたオタゴ大学 Glenn R. Summerhayes 教授をはじめ、人文学部社会科学科考古学専攻の皆さまに厚く御礼を申し上げます。また、逐一お名前を記すことができませんが、今回の調査にあたり各種懇切なご教示をいただいた各博物館関係者の皆さまにも衷心より感謝致します。

註

- 1) 本論中のマオリ語名称・地名（行政地名以外）のアルファベット表記は斜体字で表現した。
- 2) ダニーデンの博物館合計28箇所今回含めなかった関連施設が3件ある。20世紀最初の歴史建築フレッチャー住宅 (Fletcher House: 727 Portobello Road, Broad Bay, Dunedin 9014) は、開館状況と展示内容の詳細を未確認である。また、スパイツ醸造所 (Speight's Brewery: 200 Rattray Street, Central Dunedin, Dunedin 9016) は、1876年からのビール製造に関する歴史展示を有料のガイド付きツアー限定で公開しているが、試飲体験が中心で営利色が強い。大麻博物館 (*Whakamana* The Cannabis Museum of Aotearoa: 192 Princes Street, Central Dunedin, Dunedin 9016) についても、開館実態や展示状況が不明確である。
- 3) オタゴ博物館が1960～1970年代に出版した研究紀要・研究報告は、以下のオタゴ博物館 HP から閲覧可能である。
<https://otagomuseum.nz/collections/publications/>
- 4) 比較的最近出版された国内150箇所以上の博物館を紹介

した書籍 (Dench 2010) を基準に、主要都市中心市街地の博物館数と市域の全人口を比較すると、オークランド市5件 (人口約153万人)、ウェリントン市8件 (人口約42万人)、ダニーデン市5件 (人口約13万人) となる。ダニーデン市は、人口比で明らかに博物館数が多い傾向が分かる。

引用・参考文献

- Anderson, Atholl 1983 *When All the Moa-Ovens Grew Cold: Nine Centuries of Changing Fortune for the Southern Maori*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Anderson, Atholl, Brian Allingham and Ian Smith eds. 1996 *Shag River Mouth: The Archaeology of an Early Southern Maori Village*, The Australian National University (Canberra)
- Baillie, Louisa Jm. and Christopher L. Smith 2018 The Otago Medical School Anatomy Museum Collection: Taonga for learning in the 21st Century, *The New Zealand Medical Journal* Vol. 131 (1473): pp. 72-77, New Zealand Medical Association (Wellington)
- Barker, M. and N. Barker 2019 *Larnach Castle: New Zealand's Castle in Pictures*, Larnach Castle Ltd. (Dunedin)
- Brailsford, Barry 1997 *The Tattooed Land*, 2nd ed., Stoneprint Press (Hamilton)
- Cawte, Sheryl, Eva Forster-Garbutt, Naomi Woods, Jeremy Moyle and Peter Mitchell 2018 *Serving the Community: St Patrick's Church Complex*, New Zealand Heritage Properties Ltd (Dunedin)
- Charters, Claire 2009 Do Maori Rights Racially Discriminate Against Non Maori?, *Victoria University of Wellington Law Review* Vol. 40 (3): pp. 649-668, Victoria University of Wellington (Wellington) [角田猛之訳 2018「マオリの権利はマオリ以外の人びとを民族的に差別しているのか?」、『ノモス (Nomos)』42号: 1-25頁、関西大学法学研究所 (大阪)]
- Church, Ian 2019 *Salutary Punishment: Taranaki Maori Prisoners in Dunedin, 1869-72 and 1879-81*, The Patea Historical Society (Patea)
- Dench, Alison 2010 *Museums to Visit in New Zealand: Over 150 Outstanding Collections Open to the Public*, New Holland Publishers (Auckland)
- Dunedin Gasworks Museum 200-? *The Engine House, Dunedin Gasworks Museum: A Guide to the Museum's History & Displays*, The Engine House (Dunedin)
- Dunlop, Eric 2002 *The story of the Dunedin Botanic Garden: New Zealand's first*, Friends of the Dunedin Botanic Garden Inc. (Dunedin)
- Dunn, Laurel and Brenda Cameron 2023 *Otago Peninsula: Then and Now*, Otago Peninsula Museum and Historical Society (Dunedin)
- Entwisle, Peter 1984 *William Mathew Hodgkins & His Circle: An Exhibition to Mark the Centennial of the Dunedin Public Art Gallery, October 1984*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Entwisle, Peter 1990 *Treasures of the Dunedin Public Art Gallery*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Goodall, Maarire and George Griffiths 1980 *Maori Dunedin*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Hamel, Jill 2001 *The Archaeology of Otago*, Department of Conservation (Wellington)
- Hinds, Elizabeth 1986 *Dunedin Gasworks: A Plan for the Preser-*

- vation and Use as a Tourist and Information Centre on the History of Gas and NZ's Energy Future, Gasworks Preservation Team (Dunedin)
- Hinds, Elizabeth ed. 1987 *Otago Early Settlers Museum*, Otago Early Settlers Association (Dunedin)
- Johnson, David 1993 *Dunedin: A Pictorial History*, Canterbury University Press (Christchurch)
- Keenan, Danny 2015 *Te Whiti o Rongomai and the Resistance of Parihaka*, Huia Publishers (Wellington)
- Knight, Hardwicke and Peter Coutts 1975 *Matanaka: Otago's First Farm*, John McIndoe (Dunedin)
- Longstaff, Jenny et al. eds. 2004 *Oveston Historic Home*, Theomin Gallery Management Committee (Dunedin)
- Martin, Bill 1998 *Dunedin Gaol: A Community Prison Since 1851*, Bill Martin (Dunedin)
- McLean, Gavin 2003 *Dunedin: History, Heritage and Wildlife*, University of Otago Press (Dunedin)
- McLintock, A. H. 1949 *The History of Otago: The Origins and Growth of a Wakefield Class Settlement*, Otago Centennial Historical Publications (Dunedin)
- Neuman, Fieke 1993 Pots and Pieces: The Anatomy Museum of the Otago Medical School and how it came to be, *New Zealand Museums Journal* 23 (1): pp. 17-22, Art Galleries and Museums Association of New Zealand, Massey University (Palmerston North)
- Notman, Robyn and Lynda Cullen 2009 *Beloved: Works from the Dunedin Public Art Gallery*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Olssen, Erik 1984 *A History of Otago*, John McIndoe Limited (Dunedin)
- Otago Museum ed. 2014 *Gifts and Legacies at the Otago Museum*, Otago Museum Trust Board (Dunedin)
- Otago Peninsula Museum and Historical Society ed. 2023 *Portobello: A Brief History*, revised ed., Otago Peninsula Museum and Historical Society (Dunedin)
- Peat, Neville 2002 *Southern Land, Southern People*, University of Otago Press (Dunedin)
- Peat, Neville 2004 *Otago Museum: Collected Stories*, Otago Museum (Dunedin)
- Petchey, P. G. 2009 *The Dunedin Causeway: Archaeological Investigations at the Wall Street Mall Site George Street, Dunedin (Archaeological site I44/469)*, Southern Archaeology Ltd. (Dunedin)
- Petchey, Peter and Sean Brosnahan 2016 Finding Meaning and Identity in New Zealand Buildings Archaeology: The Example of 'Parihaka' House, Dunedin, *Journal of Pacific Archaeology* Vol. 7 No. 2: pp. 26-42, New Zealand Archaeological Association (Dunedin)
- Read, Peter and Sean Brosnahan 2019 *Toitū Otago Settlers Museum: Our Place, Our People, Our Stories*, Toitū Otago Settlers Museum (Dunedin)
- Salmond, Arthur L. 1983 *The First Church of Otago, and How it Got There*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Shaw, Peter 1992 *The Fletcher House, Broad Bay, Otago Peninsula, New Zealand*, Fletcher Challenge Limited (Auckland)
- Skinner, H. D. 1959 Murdering Beach: Collecting and Excavating: The First Phase 1850-1950, *Journal of the Polynesian Society* Vol. 68 (3): pp. 218-238 · Plate I-X, The Polynesian Society (Wellington)
- Summerhayes, Glenn R. and Rieko Hayakawa 2023 「Scottish Traditions in Otago Education」、『ニューージーランド研究』: 1-6頁、ニューージーランド学会 (京都)
- Trotter, M. Michael 1951? *Monterey Museum, Katiki, N. Otago*, Monterey Museum (Katiki)
- Wigglesworth, Karen 2022 *Take Me with You too!: A Self-Drive Guide to Dunedin's Engineering Heritage*, Cliff Creatives (Whanganui)
- 印東道子 2008 「絶滅した巨大な鳥モア」、『ニューージーランドを知るための63章』: 49-53頁、明石書店 (東京)
- 小樽市博物館編 2002 『豊饒の島の物語: ニューージーランド南島の自然と文化』、小樽市博物館 (北海道)
- 沢井淳弘 2003 『ニューージーランド植民の歴史: イギリス帝国史の一環として』、昭和堂 (京都)
- 土井冬樹 2023 「コロニアリティの発見と謝罪・負の遺産化・脱植民地化: 博物館の実践と舞踊の流用に対する先住民マオリの主張」、『インターセクション』 1号: 5-23頁、同志社大学都市共生研究センター (京都)
- 土井冬樹 2024 「マオリと博物館のパートナーシップ: 脱植民地化を目指すニューージーランドの先住民と博物館」、『文化人類学』 89巻 1号: 72-90頁、日本文化人類学会 (東京)
- 向井考史 2015 「パリハカ: 非暴力・不服従抵抗運動の地」、『神学研究』 62号: 121-130頁、関西学院大学神学部・神学研究科 (兵庫)
- 村田麻里子 2020 「オークランド戦争記念博物館にみるニューージーランドの多文化主義」、『関西大学社会学部紀要』 52巻 1号: 93-117頁、関西大学 (大阪)

伊藤 慎二 (いとう しんじ) 国際文化学部教授